

にしておかけいじ ブータン農業の父 西岡京治



ブータンの民族衣装を着た西岡京治

1992年（平成4）3月26日、ブータンの西部にあるパロの町で、ひとりの日本人西岡京治（にしておかけいじ）のお葬式が国葬として行われました。

日本ではあまり京治のことを知られていませんが、ブータンの人たちはだれもが知っています。28年間にもわたって、農業の指導に当たってきたからです。

京治の功績^{こうせき}をたたえて、国王は最高に優れた人^{すぐ}を意味する称号^{しょうごう}「ダショー」をおくりました。その「ダショー・ニシオカ」が突然亡くなったのです。ブータン^{とつぜん}の人たちはおどろきと悲しみにつつまれました。その国葬^{こくそう}には、農家の人たちはもちろん、王室や政府の人たちもぞくぞくと集まり別れ^おを惜しみました。

その京治は大の花好きのお母さん^{もと}の下で育ちました。そのため高校生のころには、植物採集^{さいしゅう}が何よりの趣味^{しゅみ}で、京治の部屋は植物の標本^{へ や ひょうほん}で足の踏み場もないほどでした。

そして、大学へ進む時「農業に役立つ植物の勉強をしたい。野菜や果物などの研究をしたい」との思いから農学部^{たんけんか}に入学しました。その大学で、植物学者として、探検家としても有名



な中尾佐助先生なかおさすけの指導を受けました。

その中尾先生しょうかいの紹介で、1958年ヒマラヤ登山で有名なネパールの探検隊たんけんたいに加わりました。ネパールの奥地おくちは、山と谷がほとんどで人々はわずかな畑で作物を作り貧まずしいくらしをしていました。

「なんとかヒマラヤ地方の人々のくらしを豊かにできないだろうか」そんな思いを胸きざに刻みました。

ブータンという国は、昔から外国との出入りを禁きんじている閉ざされた国でした。しかし、1952年ころより、国の発展はってんのためには外国の人の力が必要であるという考えに変えてきました。そして、ブータンの首相から中尾先生に「ブータンの農業を発展させるため、日本の農業の専門家せんもんかを派遣はけんしてほしい」という要望ようぼうがきました。中尾先生は西岡京治もつとが最もすいふさわしい人であると推せんしました。

1964年4月京治は奥さんと一緒にブータンに旅立ちました。そして、標高2400メートルのパロとうちやくに到着しました。

京治はさっそく農業開発のうぎょうかいはつをすすめている役所へあいさつに行きました。その役所にはインド人の局長きよくちょうや職員しょくいんがいて「ブータンの農業はインド人のわれわれが一番よくわかっている。あなたが、いきなり海のかなたの日本の農業技術のうぎょうぎじゅつを持ち込んでも成功しません」と冷たくあしらわれました。ブータンでは、その当時、農業だけでなく教育や医学どぼくこうじ、土木工事でもインド人の指導を受けていました。

ブータンの農業の大きな問題は、食料じきゅうりつの自給率が低く、国民のほとんどが農民でありながら60%の食料しか作れず、足りない分はインドから輸入ゆにゅうしていたのです。「昔からの農業を変えて、新しい方法を取り入れなければならない。そのためには試験農場しけんのうじょうで農作物を作り、そ

れを^{じっさい}実際に見てもらおうしかない」と京治は考えました。

しかし、京治が使える農地はありません。これでは日本からきた意味がない。京治は政府に直接そのことを^{ようぼう}要望しました。やがて、わずか200平方メートルの^{のうち}農地が^{ていきょう}提供され、3人の少年を^{じっしゅうせい}実習生としてつけてくれました。さっそく、その農地に日本から持ってきたダイコン・キュウリ・キャベツ・トマト・インゲン豆などの種をまきました。野菜づくりは京治のもっとも^{とくい}得意とするものです。

毎日世話する野菜の栽培^{さいばい}日誌をつけて記録していきました。7月になると思った以上の^{せいいく}成育ぶりです。パロの土は野菜作りに適しているのかキャベツやキュウリは上々のできばえですが、特にダイコンは大きく育ちました。



初めて採れたダイコン

京治は3人の少年に「畑の野菜も、田んぼの稲も、人が心をかければ必ずこたえてくれるんだよ。」と^{おし}教えました。

今まで見たこともないようなダイコンを見て、ブータンの人たちはおどろきました。

そして、「種が欲しい」「作り方を教えてほしい」と訪問する人が出てきました。

2年目には、狭い農地でできた野菜を^{こっ}国会議事堂^{かいぎじどう}の前で^{てんじ}展示しました。これが

^{だいひょうばん}大評判となりました。そして、国王から今までの400倍もの広い試験農場が^{ていきょう}提供されることになりました。実習生も6人も増やしてくれました。

次に取り組んだのがブータンの主食である米の^{しゅうかく}収穫を増やす方法

でした。ブータンでは昔から稲の苗を手当たりしだいばらばらに植え

ていました。それを日本の田植えのように一定の間隔^{かんかく}に植えていく
並木^{なみきう}植えに変えていくことをすすめました。並木^{なみきう}植えにすると草取り
が楽になるとともに、風通しもよくなり、収穫が4割も増えるのです。

しかし、ブータンの人たちはなかなか今までの植え方を変えようと
しません。それでも京治は根気^{こんきづよ}強く指導を続けていきました。そして
8年のちには多くの農家が並木^{なみきう}植えをするようになりました。寒さに
強く、収穫の多い日本の米の品種^{ひんしゆ}をすすめ、広めていきました。また、
リンゴ・カキ・モモ・ナシなどの果物の苗^{くだもの}を農場で育て果物の栽培を
ブータン各地に広げていきました。

そして、農家の収入を増やすことにも京治は取り組みました。もともとブ
ータンは自給自足^{じきゆうじそく}の経済でお金をあ
まり使わず物々交換^{ぶつぷつこうかん}で生活していま
した。そこで、京治は、農場で作った
野菜を自ら街頭^{がいとう}で販売することを試
みました。やがて、人々は、それを見
習い^{いちば}、市場で野菜を売り収入を得るよ
うになりました。



野菜を自ら街頭で販売する京治

1972年、京治は国王からシエムガン県の農業を変えていく仕事
を頼^{たの}まれました。シエムガン県は、焼き畑^や農業^{はたのうぎょう}に頼^{たよ}り、決まった場所
に住めず、いつも食べ物が不足し、ブータンでもっとも貧^{まず}しい県であ
りました。

京治たちは、住民たちに水田を作することをすすめました。山と谷がほとんどのこの県で水田を作^{なみたいてい}ることは並大抵のことではありません。大変な労力が必要です。そのため反対する住民も多く、京治は人々の協力を得るため800回にも及ぶ話し合いの会をもちました。

人々は京治の余^{あま}りの熱心さに心打たれ、次第^{しだい}に水田作り、水路作りに参加するようになりました。そして、8年後の1980年ころには、



水田をつくることをすすめる村人たちとの話し合い 中央帽子をかぶっているのが京治



水田をつくるため、斜面をきりひらく作業ほとんどが手作業

3万トンの米が収穫され、3万人を超える人たちが田や畑のある土地に住むことができるようになりました。そして、学校もでき、診療所^{しんりょうしょ}もでき、人々の生活は^{みちが}見違えるように良くなりました。

パロの農場に^{もど}戻った京治は、ブータン農業をさらに発展させるため、「農業機械化センター」を作り、^{かんたん}簡単な農機具^{のうきぐ}を作ったり、^{しゅうり}修理したりすることに取り組みました。さらに野菜や果物を^{くだもの}ジュースや缶詰^{かんづめ}にする技術^{ぎじゅつ}も指導しました。そして、パロの農場によく似た試験農場をブータンの各地につくり、指導者をどんどん増やしていきました。

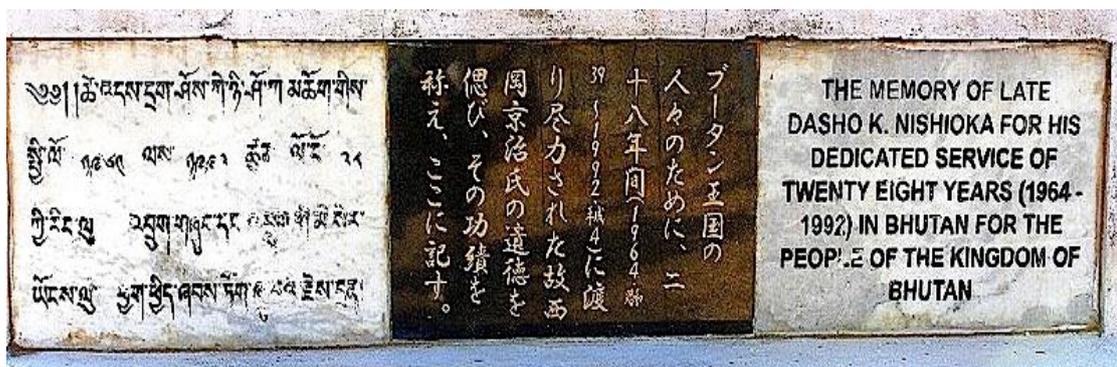
このように、京治はブータンの農民の立場を^{てま}考え、手間ひまをかけ

た技術指導を行い、農民の生活の向上のため、根気強く、農業の発展に取り組み、一生を捧げました。

このような西岡京治の功績をたたえるため、ブータン政府は、「西岡チオルテン」という仏塔を建立しました。



西岡チオルテン



チオルテンの中央に刻まれた日本語で書かれた京治をたたえた文

参考にさせていただいた本

- | | |
|-----------------|-------|
| 「ブータンの朝日に夢をのせて」 | 木暮政夫著 |
| 「秘境ブータン」 | 中尾佐助著 |
| 「遙かなるブータン」 | 後藤多聞著 |